制作過程と概要

作品は「インスタレーション」、「パフォーマンス」、「ストーリー」「サウンド」など多角的アプローチにより成立するミクストメディア作品である。

制作のきっかけは私的な疑問に端を発する。しかしその根底に存在する本質的議題や、織りなす事象がパブリックな問題へと置換されうることに気付かされる。

私は作品という形でそれら問題を提起する為に制作過程上で、第三者的存在になることを必要とする。

「主観」から「客観」になり、テーマに対し距離を保つ事で、観覧者に不必要な私的感情や情報を削ぎ落とす工程を経て、仮想世界を舞台（インスタレーション）として提示する。

たびたびその世界は具象的でありながら非現実的世界観を纏い、夢と現実の狭間を見るようでありつつも、そこには「パフォーマンス」という肉体的技法によるリアリティーが混在する。

複数の技法と過程を経て、多次元的アプローチにより、テーマを浮き彫りにし、観覧者に問題提起する。

真実の天秤を持つ者は誰か

そこで観覧者が導き出す答えはどれもが真実であり、どれもが誤りである可能性を秘めている。

人の織りなす感情は繊細で、一辺倒でなく、流動的でつかみどころがない。堅牢さと共に柔和さを併せ持ち、残酷性と慈悲が共存しえる。

そんな不確かさを持つ私たちが求める真実の不確かさ、パラドックスが作品に漂う。

しかし、真実を求めることは喜びであり、私たちの本能的欲求であると私は考える。

新しい時代を築く為に先人が苦脳したように、私たちもまた構築する為に議題に向き合い、答えを求め続ける。

だが歴史が証明するように、それでもなを不完全な私たちは、しばしば真の事実を求める目的を喪失し、エゴイスティックな欲求に合わせて本質を歪曲させることも厭わない。

そこには如何に人にとって『定かでない』ことがある種の恐怖であり、人生に価値を。存在に意味を求めてしまうように、私たちは何かしらの答えを得ようとすることで、そこにある不気味な不安を払拭したいのかを知る。

不確かなものに形を与え、そこに在る感触を知り、温度を感じたい。そんな欲望を私たちは根幹に内包しているように思うのだ。

交錯するマテリアル
空間軸と時間軸、肉体と

前述したように、作品は複数の手法。『マテリアル』で構成される。

その中には、触感的には掴みきれない、空間と時間、肉体という要素が重要なキーの一つだ。

空間は個性を持つ。その土地の歴史、人と建物、場所がどう関わってきたのか。

また基本的に、自身のパフォーマンス、ダンスなど身体表現には、台本や振付は存在しない。

ある一定の「スコア」は存在するが、空間の状態と観客との関係性で「その瞬間」に変化する。

その空間、その時間軸でしか表現できないものを掴み取り、観客と共有する事が作品において非常に重要だと考える。

観客は観客であると同時に作品の一部であることを意識することはないだろう。しかし、観客とダンサーとの関係性はその空間とそこに流れる時間によって変容し、観客もまた、作品の一部となって溶け込んでいくと考える。

観客という探求者

前述してきた様に、自身の作品で、私は問題提起をすると同時に、観客もまた作品の一部であると述べた。

それは、テーマに対して、ある一つの答えを作家が主導するのではなく、鑑賞する前と見た後の思考のプロセスに、互いに何らかの変化を生じさせる事が目的である為でもある。

作家はテーマに対し思考の極致を見たいと切望する。

私の作品では観客もまた思考の探求者として存在してくれることを願う。

そうする事で作品世界はより豊かな土壌を育むのではないだろうか。

各々がどの様な答えを、どの様な形によって導くかを作家は想像することしかできないが、思考するという人間が持った智慧は、万人に与えられた普遍的存在なのだから。